



Self-Discipline



Compassion



Responsibility



Friendship



Work

ウィリアム・J・ベネット
魔法の糸
編著 大地舜 訳

こころが豊かになる世界の寓話・説話・逸話100選



Courage



Persistence



Honesty



Loyalty



Faith

THE BOOK OF VIRTUES

こころが豊かになる世界の寓話・説話・逸話100選

魔法の糸

ウィリアム・J・ベネット

編著 大地舜 訳

魔法の糸

一九九七年三月二十日 初版第一刷発行

一九九七年六月三十日 初版第八刷発行

編著者——ウイリアム・J・ベネット

訳者——大地 舜

発行者——小林恒也

発行所——株式会社 実務教育出版

東京都新宿区大京町二五 千一六三一九一

電話 〇三―三三三五―一九五一 (販売)

〇三―三三三五―〇九二一 (編集)

振替 〇〇―一六〇―〇一七八二七〇

印刷——奥村印刷 株式会社

製本——石毛製本所

検印省略 © 1997 Shun Daichi

ISBN 4-7889-1710-6 C0098

Printed in Japan

落丁・乱丁本は本社にておとりかえます。

はじめに……………

この本は、昔ながらの大事なこと、つまり子どもや若者たちの人格や道徳心をいかに高めたらよいのか、をテーマにまとめられています。人格を高めるには多くのことが必要ですが、主として心と知性の訓練が欠かせません。この本の中では、人生で役に立つ原則や教訓、明確な教え、励ましの言葉、自分自身の高め方などが語られています。アリストテレスが、「若いときに身につけたよい習慣が大きな違いを生む」と述べているように、人格を高めるにはよい習慣をもつことが絶対に必要です。さらにはお手本が大切です。よくいわれますが、黙って「善い行い」のおお手本を示されることほど、子どもたちに深い影響を与えるものはありません。子どもたちが、人格の基礎となる「徳（道徳）」を真剣に受け止めるようになるには、まわりに「徳」を大事にする大人がいなくてはなりません。子どもたちは「徳」を真剣に受け止める大人たちの姿を目のあたりにする必要があるのです。

教訓やよい習慣やお手本などとともに、「徳とは何か？」をよく知ることが大切です。この本に収められたお話の数々は、子どもたちに「徳とは何か？」をよく知ってもらう助けになるに違いありません。一番のねらいは、「徳」とは何か、「徳」の実践とはどういうことなのか、どうしたら「徳」を確かめられるのか、その効果は何か……を、お父さんやお母さん、先生たち、そし

て子どもたちに示すことです。

そうした点でこの本は、「徳とは何か？」の理解を深めるための実用書ともいえます。もしも子どもたちに、尊敬に値する素晴らしい人格を身につけてもらいたいと願うなら、まず、尊敬できる人格とは何か、それがなぜ尊敬や忠誠をかちとることにつながるのかを教えなければなりません。つまり、子どもたちは、優れた人格というもののかたちと内容が具体的にわからなければならぬのです。徳の基本を知っておけば、子どもたちは人生における出来事を正しく理解し、よりよい人生を送れる期待ももてるでしょう。

では、そのための教材はどこにあるのでしょうか？ 答えは実に簡単——車輪を新たに発明する必要はありません。私たちにはすでに豊かな土壌があるのです。それは、ひと昔前ならばどこかの家庭でも、学校でも、教会でも、子どもたちに語られていたものです。現在、そのような習慣は失われてきています。この本が、その素晴らしい習慣を取り戻すきっかけとなったらと願っています。

だれでも、人格の基礎となる資質——正直さや同情心や勇気や忍耐などについて、同じように敬意を払います。まさしくそれらが「徳」なのです。しかし、子どもたちはあらかじめ、これらの知識をもって生まれてくるわけではありません。だからこそ「徳とは何か？」を学ぶ必要があるのです。「徳」の物語を与えれば、彼らはそれを理解し、評価できるようになるでしょう。いろいろな物語や歴史的な出来事、有名人の逸話を通して、「徳」の理解を深め、判断できるよう

になるのです。世の中には、子どもたちにぜひ読んでもらいたい、実に数多くの素晴らしい「徳」や「墮落」の物語があります。この本は、それらの中でも最も素晴らしい、最も感動的な物語を選びすぐって集めています。

残念なことに、子どもたちは、これらの作品をほとんど知らないでしょう。なぜなら、教える習慣がなくなってしまったからです。しかし今こそ、再び教えるべきときなのです。

なぜ、今がそのときなのでしょう。

まず第一に、これらの物語は、「道徳論」の科目などとは違って、子どもたちにしっかりとした心の拠り所を与えることができます。文学や歴史は「徳」の理解を深める宝庫といえます。その宝庫を利用しない手はありません。子どもたちにとっては、ごく身近に「何が正しく、何がまちがっているのか」、「何がよく、何が悪いのか」を示すお手本があることが大事なのです。それは、道徳的な善悪が簡単にわかり、深い理解と正しい行動を導くものでなくてはなりません。

第二に、この本の物語は、子どもたちの心をひきつけてやまないものばかりです。もちろん、子どもたちの理解力のレベルに合わせて内容や伝え方は変えなければなりません。しかし、テレビであろうとなんであろうと、「昔々あるところで……」ではじまる素敵すてきな物語を超えるものはないのです。

第三に、これらの物語によって、子どもたちは文化、歴史、伝統にしっかりと根を下ろすことになります。心の拠り所や支えは人生の助けとなりますが、道徳的な支えや心の拠り所が、今ほ

ど必要なときはありません。

第四に、これらの物語を伝えることによって、私たち大人も復興にかかわることになります。子どもたちを、私たちの世界に迎え入れようではありませんか。その世界とは、「徳」という理想を共有する人々の社会です。この世界の中でこそ、私たちが大切に思う原則、理想、よいこと、偉大なこと……の保存と継承の仕事に、子どもたちを招待できるのです。

この本にざっと目を通してみると、読者のみなさんは、核戦争や墮胎、天地創造や安楽死などに触れていないことに気づくでしょう。そのことを不満に思う方もいるかもしれませんが。しかし、若者の人格形成と、今日の複雑な倫理的問題について論じerことは、別のことだと思えます。まず第一に行うべきなのは、子どもたちに「徳」の理想を植えつけ、よい性格を育てることなのです。人生同様、正しい生き方を身につけるにも、一步一步ステップを踏まなければなりません。世の中のあらゆる物事は複雑で、議論は絶えないものです。倫理についても同様です。しかし一方で、何事にも基本があります。価値観にさえも基本はあります。この本はその基本を伝えるものなのです。親や先生が望むなら、難しい問題は後になって取り上げればよいのです。そうした難しい問題に直面したときでも、「徳とは何か？」がよくわかつている人のほうが、無知な人よりも、道理にかなった、倫理的にも正しい判断を下せるはずです。しかし、若いときにはまず、人格の形成と「徳とは何か？」を知ることが先決です。困難な問題には後から取り組めばよいのです。高校生になってから、いや、その後でも遅くはありません。

また「徳の理解」を深めたり、人格を磨くことは、政治的なことではありません。優れた人格をもつ人が、難しい政治的、社会的な問題に対して必ずしも同じ立場を取るわけではありません。「徳とは何か？」をよくわきまえた人格者は、保守派かもしれませんし、革新派かもしれません。政治的論争があるからといって、優れた人格の形成や「徳」の重要性に関して、子どもたちへの義務を果たすことを避けてはなりません。この本は人類の歴史や文学から取り出した素晴らしい物語やエピソードの集大成です。風雪に耐えてきた「徳」の物語で満たされています。子どもたちはもちろん、あらゆる政治的・宗教的背景をもつ人々のためのもです。この本は、人種や性別よりもさらに根本的な事柄を扱っています。人間……それも「徳のある人間」について語っているのです。

子どもたちだけでなく、親にも先生にも、これらの物語のいくつかをぜひ知っておいて欲しいと思います。物語の中には、現代人にとってあまりにも素朴で感傷的で、古くさいと感じるものもあるかもしれません。しかし、子どもたちはそうは感じないでしょう。初めて出会った物語ならばなおさらです。同時に、大人であっても、日常から離れた静かな場所で読めば、これらの素朴な物語を大いに楽しめることでしょう。大人なら知っているはずの、あるいは忘れてしまった物語、まだ読んでいない物語などがあるはずです（覚えているでしょうか！「ダモクレスの剣」とはどんな話でしたか？ 答えはこの本の中にあります）。この本は教育のための本ですが、追憶の本でもあるのです。

この本をまとめるにあたって、多くのことを学びました。まず、ひとつひとつの話を読むことで心が開かれ、自分自身を再発見することになりました。忘れていた多くの偉大な物語を思い出したのです。また、多くの友人や先生、そして編集作業に携わった有能な仲間たちによって、これまで知らなかった多くの物語にも出会えました。さらにこの三〇年間で、ずいぶんと教育や本の内容が変わったことも発見しました。「昔話」を読みながら、今日の文学や娯楽との違いに大いに驚かされました。

この本に収められた物語ひとつひとつは、人の心の深層と道徳観に大胆に触れてきます。今日、私たちは倫理について語り、倫理観をもつことの重要性を口にします。それはまるで「倫理」を、ビーズか大理石のように「所有できる」ものとしてとらえているかのようです。しかし、この本の物語における道義や「徳」は所有できるものではありません。むしろ人間性の中心に備わっているもので、一番大切な生き方を示すものです。この本を読むということは、まったく異なった場所と時代——子どもとは本来、道徳的で神聖な存在であることを疑わなかった時代——に身を置くことでもあります。その時代の教育の中心の仕事は「徳」の育成でした。この本の読者は、真理とは「道義的真理」を意味していた時代（そんなに古くはありません）を思い起こすことになるでしょう。ですから、今日の歪曲した時代にとっては一服の解毒剤になると思います。親がこの本を子どもに読んで聞かせたり、一緒に読むことによって、子どもたちだけでなく、親自身もまた、人生や「徳」についての理解が深まる経験をしていただけたとしたら、努

力のしがいがあったというものです。

さらにいくつか述べておくことがあります。この本は、「徳」の項目によって章が分けられています。しかし、この本は「墮落」についての本でもあります。多くの物語は、「徳」を逆説的に語っています。子どもたちが「徳」を理解するには、「悪徳」についても知る必要があるのです。

物語を語るにあたっては、歴史的な教訓よりも道義的な教訓に着目しています。「ウィリアム・テル」、「ジョージ・ワシントンと桜の木」などの古い話は、すでに伝説と歴史の境界があいまいになっています。しかし、この本はあえて道義的な教訓のほうを大切にしています。この中で語られている歴史物語は、厳格な歴史家の基準には達していないかもしれませんが。それらのおなじみの物語は、ずっと昔から同じスタイルで語られているからです。

さらに、この本は優れた「徳」の物語の決定版ではありません。この本の内容は、ほとんどが欧米の文献から引用したもので、古きよき時代のアメリカの子どもなら、だれもが知っていたものを特に選んでいます。また、今回の編纂においても、他の本と同様に、紙面の余裕や経済的事情など、いくつかの面で制限がありました（最近の物語を掲載したり、翻訳をする権利は大変に高つく一方、古典はそのほとんどが公共物となっています）。欧米だけでなく世界の文化は、素晴らしい文芸作品の宝庫ですが、この本はまだその表面に触れたにすぎません。そこで、読者の方々は、この本に掲載されていないお気に入りの物語があったら、ぜひ連絡してください。

うお願いします。将来、この本をさらに充実させることができるかもしれないからです。

この本は、はじめから順に読まなくてもかまいません。むしろ、好きなところを拾い読みしたり、家族に読んで聞かせたり、ところどころを暗記しながら読んでもらえたらと思います。また、お父さんやお母さん、そして先生方は、興味深い物語を見つけたら、ぜひ子どもたちに教えてあげてください。どの章から読んでもかまいません。その時々、読みたいところを読んでください。

それぞれの章は、やさしい物語から難しい内容へと展開しています。各章の最初の部分は、ごく小さな子どもに読んで聞かせるか、子どもが自分で読める程度の内容になっています。しかし、読み進むうちに、だんだんと読解力や、概念の理解が必要となってきます。とにかく子どもには、読めるところまで読ませてみてください。子どもが大きくなるにつれ、この本の難しい部分も読めるようになってくるでしょう。そう、子どもたちはこの本とともに成長できるのです（たぶん、もつとずつと成長するでしょう！）。

最後になりましたが、この本は勇気を鼓舞する本であって欲しいと思います。人生において、読書や経験は、必ずしも勇気づけてくれるものばかりではありません。しかし、この本は人々を勇気づける本でありたいのです。「人間性に存在する善の天使たち」のほうに目を向けたのです。この本が、「何が大切なのか」を思い起こさせてくれることを願うばかりです。そして人生に対する意欲もわくはずです。聖パウロは「何が真実であれ、何が名誉であれ、何が正しくて

も、何が純粹でも、何が美しくても、何が評判よくても……何か優れたもの、稱賛に値するものがあつたら、あなたの心をそこに留めなさい」といつています。

読者の方々がこの本を読み、心をそこに留めることを望んでいます。

サイモン&シュスター社の有能な編集者ボブ・アサヒナ氏には大変にお世話になりました。彼の激励と助言といつても変わらぬ冷静な判断には大いに助けられました。同じくサイモン&シュスター社のサラ・ピンクニー氏はスケジュールどおりにことを運んでくれました。彼女は目標を定め、常に穏やかに質問に答え、解決策を見だし、助言をしてくれたのです。エージェントのロバート・バーネット氏は優れたカウンセラーでもあり、この仕事に情熱を注いでくれました。この本の編纂にあたった二人の同僚については、特に感謝します。賢明なステイブン・ティグナー氏は、どこに何があるかを熟知しており、「徳」の正しい表現のしかたも知っていました。彼は支援を約束し、そのとおり実行してくれました。まさに「徳」の人です。もう一人の同僚、ジョン・クリブ氏の努力でこの本は生まれています。いくら感謝しても足りません。彼は知識の宝庫である下院図書館に埋もれ、古ぼけた絵本や雑誌を飽きることなく調査してくれました。彼は物語を愛し、この本の考え方の虜になりました。彼は発掘者であり、探偵であり、記録係であり、調査官であり、批評家でした。彼の尽力と、素晴らしい友情の手本に感謝しています。

最後になりましたが、妻のエレインはこの本こそ「私の本」であり、私が手がけなければいけ

ないと思っていました。彼女は今回も正しかったのです。また、本を読み、検討し、意見を述べ、忠告をしてくれました。私の人生のあらゆる面で、彼女がかかわるとすべてがより優れた結果となるのです。皮肉なことですが、彼女にはもうひとつお礼を言わなければなりません。私が昼間の多くの仕事で疲れ果てて居眠りした夜（仕事の中にはこの本の編纂も入ります）、彼女は眠らずに起きていて、わが家の男の子たちに、この本にあるような素晴らしい物語を読んで聞かせてくれたのです。

何事においても、「最初」というのは、一番大切、特に若者や幼い者にとつては大切だということは、だれもが認めるところだ。なぜなら、この時期に性格が形成されるし、色に染まりやすいからだ……。もしも不注意であつたために、子どもが墮落した人から墮落した物語を聞くようなことがあつたら、そしてこちらが望んでいるような考えではなく、それと正反対の考えが吹き込まれたら、いったいどうするのだ？

若いときに吹き込まれた考えを消すことはだれもできないし、変えることもできない。だから子どもが最初に聞く物語が「徳」の模範的な話であることが極めて重要だ。そうすれば、若者は健全な場所にとどまり、清らかな光景と音楽に包まれ、すべての面で素晴らしいものを受け取るだろう。そして美も、真面目な労働も、純粋な場所から吹くそよ風のように、目や耳に飛び込むだろう。その結果、幼いときから最高の理性に心を寄せる可能性が高まる。

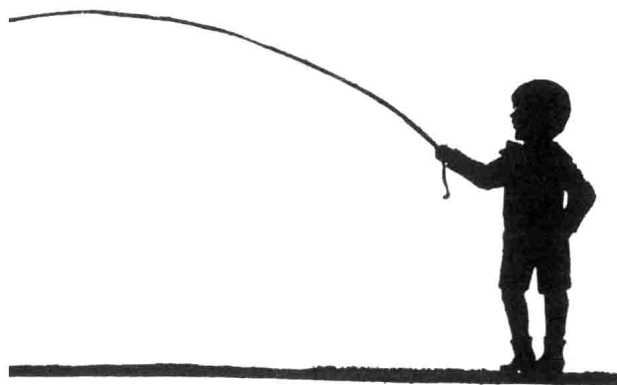
これよりも高貴な訓練などは存在しないのだ。

——プラトンの『国家』より

CONTENTS

◆自分に厳しくなる【自己規律】

- ブリーズ（アリシア・アスピンウォール）…………… 5
- 王様と鷹（ジェームズ・ボールドウィン）…………… 10
- 男の子と木の実（イソップ）…………… 14
- 蛙と井戸（イソップ）…………… 16
- 漁師とその妻（クリフトン・ジョンソン）…………… 17
- 魔法の糸…………… 26
- 触れるものみな黄金に（ナザニエル・ホーソン）…………… 37
- 海辺のカヌート王（ジェームズ・ボールドウィン）…………… 43
- フェイトン（トーマス・ブルフィンチ）…………… 46



●ジョージ・ワシントンの処世訓……………54

●人にはどのくらいの土地が必要か？（トルストイ）……………61

●プラトンによる「自己規律」（ゴルギアスより）……………74

◆人にやさしくする「同情」

●ライオンとネズミ（イソップ）……………84

●かわいいお目さま（エタ・A・ブライスデル&メアリー・F・ブライスデル）……………86

●ラビット氏の感謝祭のディナー（キャロリン・シャーウィン・ペイリー）……………89

●アンドロクレスとライオン（ジェームズ・ボールドウィン）……………95

●ひしゃくの伝説（J・ペルグ・エッセンウエイン&マリエッタ・ストツカード）……………99

●美女と野獣（クリフトン・ジョンソン）……………103

●大金持ちのクロイソス（ジェームズ・ボールドウィン）……………118

●おばあさんのテーブル（グリム）……………124

●戦場の天使（ジョアンナ・ストロング&トム・B・レオナルド）……………126

●愛のあるところに神あり（トルストイ）……………131

●賢者の贈り物（O・ヘンリー）……………146



◆やるべきことを成し遂げる[責任感]

●聖ジョージと悪竜（丁・ベルグ・エッセンウエイン&マリエッタ・ストツカード）*……………162

●アルフレッド王とパン（ジェームズ・ボールドウイン）*……………168

●馬蹄の鍔がなくて（ジェームズ・ボールドウイン）*……………172

●小さなエチケツト集……………176

●ガラスくずが入った金庫……………178

●アトリの鐘（ジェームズ・ボールドウイン）*……………181

●イカロスとダイダロス……………187

●ダモクレスの剣（ジェームズ・ボールドウイン）*……………192

●無口な夫婦……………196

●ヒルトン家の休日（サラ・オーン・ジュエツト）……………200

●国家の良心を呼び起こせ（フレデリック・ダグラス）……………226

◆友達を大切にする[友情]

●ピロードのウサギ（マージェリー・ウイリアムス）……………235

